# 銀色の裏地

石井睦美　作
しんや ゆう子　絵

1 クラスがえで、理緒、あかね、希恵の仲よし三人グループは、二人と一人に分かれた。一人になったのは理緒だ。

2 その日の午後、児童館であかねたちとかんバッジを作りながら、

「三人いっしょじゃないなら、公平に一人ずつにしてほしかった。」

と、理緒は不満をぶちまけた。

3 理緒の学校はどの学年も二クラスだから、一人ずつになることは絶対にない。そんなことは理緒だって百も承知だが、言わないではいられなかったのだ。頭で分かることと心がみとめることは、ちがうようなのだ。

「理緒の気持ち、すごく分かる。」

新漢字　281ページ
心情（ジョウ なさけ）
心情　人物が思ったり感じたりしていること。290ページ
印象（ショウ ゾウ）
絶対（ゼツ たえる たやす たつ）



4 分かってくれるんだとうれしくて、えみがうかんだとたん、「でも」というあかねの声が耳にとどいた。

5 えっ。でもって、なに。うかんだばかりのえみが、たちまち消える。

「これからだって、こうして遊べるよ。」

「そうだよ。」

と、希恵も相づちを打った。

「うん。」

と答えながら、だからってそれでいいってことにはならないんだと理緒は思った。三人でいても、なんだかもう、二人と一人みたいだった。

「あかねちゃんたちは、あなたをはげまそうとしていたんでしょ。いつまでもぐずぐずしていないで、さ、元気に登校しなさい。ほら、今日もいい天気。」

6 お母さんにはっぱをかけられ、理緒はげんかんを出た。見上げた空は、厚い雲でおおわれている。

「いい天気って、うそばっかり。思いっ切りくもりじゃん。」

7 お母さんのいいかげんさに、はらが立つよりおかしさがこみ上げてきた。よし、今日のくじ引きはいい席を引き当てるぞ。理緒はそう意気ごんだ。

8 くじ引きで決まった席の左どなりは高橋さんで、右どなりはかべ。

9 高橋さんとは一度も同じクラスになったことはないけれど、高橋さんが去年、作文コンクールで賞を取ったことは、理緒も知っていた。全校朝会のとき、校長先生から賞状を受け取っていたからだ。そのときの高橋さんは、つんとすましして、こんなことどうっていうことはないのよと言いたげに見えた。そんなふうに見えたのは、理緒が文章を書くのが苦手だからかもしれない。

10 理緒は、高橋さんをちらりと見た。まっすぐ前を見て、背すじをぴっとのば

厚い（あつい）

賞（ショウ）

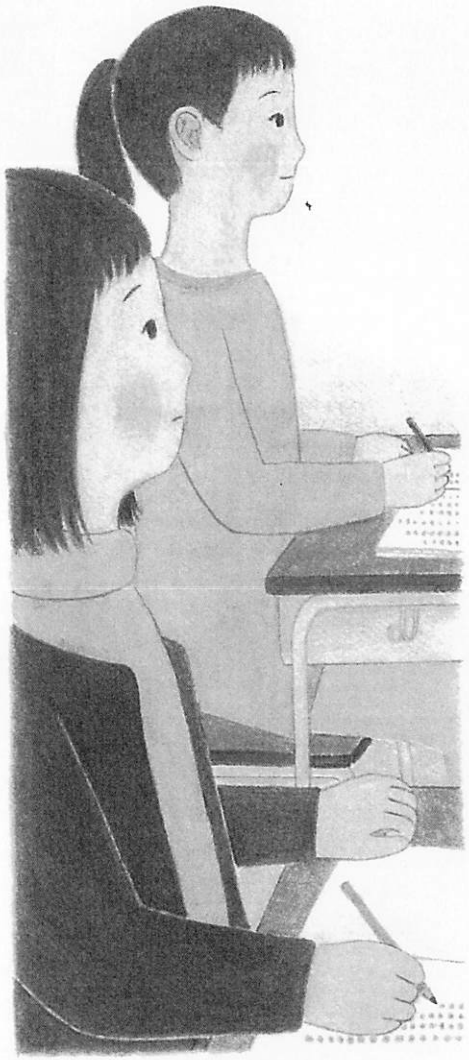
賞状（ショウジョウ）



してすわっているすがたは、まぎれもなく、あのときの高橋さんだ。

11 なんだか話しかけにくい――。

12 理緒は右を向いて、教科書をわすれたら見せて、と心の中でかべによびかけた。それからすぐに、見せられるわけないでしょ、と自分で自分につっこみを入れた。



13 給食の時間になると、理緒と高橋さんはつくえを付けた。それに、後ろの席の土田君と上野君も。

14 高橋さんは、給食をおいしそうに食べ、楽しそうにおしゃべりをした。全然つんつんしていない。それどころか、おもしろい人のようだ。その発見を、理緒はなぜかすなおに喜べなくて、喜べない自分にもやもやした。

15 そのときだった。

「なんて顔してんの」

と、土田君が話しかけてきたのだ。

16 土田君とは家が近所で、小さいころからずっといっしょに遊んできた。そのせいか、言いにくいこともずばりと言ってくる。

「なんて顔って、なに」

「おこっているような、こまっているような、そんな顔」

「しいたけが入ってたから」

苦しまぎれに理緒は答えた。でも、しいたけが入っていたのは本当だから、全

喜ぶ（よろこぶ）



くのうそというわけでもない。すると、

「しいたけ、わたしも苦手。だから、食べるときに、これはまだ食べたことのない、世界一おいしいものだって想像して食べることにしてる」

と高橋さんは言って、中華スープの中からしいたけを取り出すと、目をつぶり、ほんのちょっと間をおいてから口に運んだ。

「へええ。今度きらいなものが出たら、やってみよう」

と、上野君が言うと、

「うん、やってみて」

と、高橋さんは何度もうなずきながら答えた。

17 その日の下校時、理緒は、あかねと希恵が仲よく帰っていくのを見た。これまでだったらすぐに追いかけたはずなのに、理緒は、二人の後ろすがたを見送ることしかできなかった。

18 「坂本さん、今日、プレーパークに行かない。」

19 いつからいたのか、ふり向くと、高橋さんが立っている。

「プレーパーク。」

ときき返した理緒に、

「うん。空を見ようと思って。今日は、空を見るのに絶好の天気だから。」

と、高橋さんはほほえんだ。

プレーパークは、児童館のとなりにあるしばふの広場で、遊具もある。けれど、高橋さんはそこで空を見るという。

20 家への帰り道、理緒はひとりで何度も空を見上げた。プレーパークに向かうときも。

21 見えるのは、朝と同じくもり空だ。なのに、絶好の天気って、どういうことだろう。不思議に思いながらプレーパークに着くと、高橋さんはもう着いていて、入り口で理緒を待っていた。

「こっちこっち。」

22 高橋さんは、ずんずんしばふの中に入っていく。理緒がついていくと、高橋さんはためらいもなく横になった。

「坂本さんもやってみて。」

「う、うん。」

23 わけが分からないまま理緒が横になると、高橋さんがぼそりと何かをつぶやいたのが聞こえた。

「なんて言ったの。」

「銀色の裏地」。

24 今度は聞き取れた。でも、銀色の裏地って、なに。

25 理緒の疑問に答えるように、高橋さんは空を見上げたまま、こう続けた。

「全ての雲には銀色の裏地がある。これ、外国のことわざなんだけどね」

「へえ。そうなんだ」

「うん。くもっていても、雲の上には太陽があるから、雲の裏側は銀色にかがやいている。だから、銀色の裏地をさがそう。そういう歌があるんだって、おじいちゃんが教えてくれた。くもった——じゃなかった、こまったことがあっても、いやなことがあっても、いいことはちゃんとあるんだって」

最後のほうを早口で、高橋さんは言った。

26 もしかして、わたしの気持ちに気づいていたの。そう思ったけれど、理緒はそのことはきかずに、だまってくもり空を見上げ続けた。

27 あの厚い雲の向こうに太陽はある。だから

石井 睦美
一九五七年、神奈川県生まれ。作家。「100年たったら」「つくえの下のとおい国」などの作品がある。

動画



今も、雲の裏側は銀色にかがやいている。そう想像するのは、とてもすてきなことだった。

理緒は、急に今朝のお母さんのことを話したくなった。

「今日って、朝からくもってたでしょ。なのに、うちのお母さんってば、『今日もいい天気』って言ったんだよ」

「おもしろいお母さんだね。あ、いいお母さんっていう意味だけど」

「うん」

「うん。」

と、理緒は返事をした。

28 はずむような声が出ていた。